

ラジオ放送  
＜令和5年7月～9月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.444



## もくじ ~ contents

### <金光教案内>

☞ 作家・かんべむさしさんによる金光教の紹介

- かんべむさしの金光教案内V 第1回 *page 1*
- かんべむさしの金光教案内V 第2回 *page 5*
- かんべむさしの金光教案内V 第3回 *page 9*
- かんべむさしの金光教案内V 第4回 *page 13*
- かんべむさしの金光教案内V 第5回 *page 17*

### <教師インタビュー>

☞ 金光教の先生へのインタビュー番組

- あなたが私をいじめるのなら *page 21*  
大阪府・堺教会 白神ナナ

### <平和>

☞ 戦争体験者のお話

- あの日、佐野の海岸で起きたこと *page 26*  
島根県・北堀教会 福島義次

### <教師インタビュー>

☞ 金光教の先生へのインタビュー番組

- 私が同性愛者であるということ *page 30*  
兵庫県・加里屋教会 井上真之
- 命のほうが大しやから *page 35*  
福岡県・黒崎教会 井上憲親

### <あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えします。

- 第1回 食べ過ぎて太った *page 40*  
／未来に安心を得るには
- 第2回 子どもが言うことを聞かない *page 44*  
／忙しいと余裕がなくなる
- 第3回 祈ったのに事故 *page 48*  
／定年後の夫婦生活にゾッとする
- 第4回 幼い頃からの劣等感 *page 52*  
／将来への漠然とした不安

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内V」

第1回

おはようございます。かんべむさしと申します。職業は作家でございます、にほんぶんげい日本文藝家協会きょうかいと日本SF作家クラブの会員になります。今朝から週1回、5週にわたってお話をさせていただきますので、どうぞよろしくお願い致します。

そして私、金光教には、40代の後半になってから、御縁を頂きました。以来、現在まで二十数年間、教会に通わせていただいておりまして、金光教は本当に穏やかで親切な、他の宗教も否定しない、間口の広い寛容な宗教であると実感

しております。

と言つても私は、「金光教でなければならん」と、皆さんを説得するつもりは全くありません。もし人生の道筋で信仰が必要になったら、それぞれが自分に向いた宗教を探せばいいと、そう考えてる人間ですので、何かその参考になればと思つて、金光教の入門案内をさせていただきただけなんです。

さて、そこです、教祖さんの紹介から始めさせていただきますが、教祖さんは元々は幕末時代の備中大谷びつちゅうおわたに、今の岡山県浅口市金光町あさひくわうで、農業をしておられた方です。子どもの頃から神仏に参るのが好きで、温和で正直な人でしたが、一方では不幸や不運にもたびたび見舞われていました。子どもを3人も亡くす。自分も大病を

する。農家にとつては家族同然の牛が2頭も死ぬ。そんな苦難を通して信心を進めるうちに、神様とお話をさせてもらえるようになられたんですね。

そしてもちろん、厳しい修行を経てのことですが、最終的には神様から、神様御自身のお名前は「天地金乃神」であると教えられ、教祖さんには「生神金光大神」、「大きな神」と書いて「大神」ですが、そういう神としての名前を与えられました。ただしこの「生神」は、信心の境地が進んだ結果、「ここに神が生まれる」「生まれた」という意味だそうで、教祖さんは、「誰でも信心を進めればそうなれますよ」と、教えておられます。

その間、教祖さんは多くの人々から頼まれて、

彼らの願いの成就や難儀の解決を、神様に祈って、かなえてもらえるようになっておられました。人の願いを神に取り次いでかなえてもらい、神の思いを人に取り次いで、その人に合った、より良い生き方を教えていく。それでこれを「取次」と申しまして、今でも金光教の基本になっている働きです。

最初は農業を続けながらでしたが、神様から、「世間には難儀に苦しむ者が大勢いるから、農業をやめて取次に専念して、助けてやってくれ」と頼まれました。そこでそれからは明治16年に亡くなられるまで、大方25年間、人助けに励まれたんですね。

ところで、農業をしながらとか、取次とか、願いをかなえてもらうとか、それだけを聞くと、

何か昔の片田舎で生まれただけの、通俗的な民間宗教のように思われるかもしれませんが、決してそうではありません。

私、仕事柄もあつて、他の宗教の入門書も読ませてもらっていますが、国の内外を問わず、きちんとした宗教には、共通する点があるのですね。そしてその共通点とは、この天地、宇宙には大いなる意思が遍く満ち渡っており、その意思を感じ取った特定の人がいて、その意思を大勢の人々に伝えて、教えていく。神と伝達者と民衆という、その三者関係です。金光教もまさにそれで成り立っているわけで、その意味では普遍宗教だと、私は思っております。

そして、教祖さんに話を戻しますと、その教えや取次の具体的な事例は、金光教の教典や

教祖さんの伝記に、たくさん載っております、幕末や明治の人々の暮らしぶりが実によく分かる本です。私にとつては、神聖な書物というより、リアルでおもしろいエピソード集だったわけで、御縁を頂いた当初、この2冊を読んだことで、私は金光教に、ぐつと親しみを感じるようになったんです。

おまけに、そこに記録されてる教祖さんが、誠に優しく、親切で、寛容な方でした。「貧しい者が困るから」と、賽銭やお供えは自由にしておられましたし、他の宗教にも敬意を払っておられたし、信者さんたちの願いや悩みは親身になって聞いてくださる。そして、神様にその成就や解決を祈ってください。

現在、金光教の教会は全国各地にあります。

毎日信者さんに個別に対応しておられる取次に  
す。ありがとうございました。

せよ、賽銭やお供えは自由であることにせよ、  
また温和で親切的な雰囲気になせよ、全て、この教  
祖さんをお手本にすることなんです。だから  
祖さんは、「良い宗教、心を開ける宗教だな」と、  
本心から思っております。

というところで、時間が来ました。それでは  
来週は、その教祖さんから直接の教えを受けた、  
近藤藤守こんどうふじもりという、大阪の難波なんばで教会を開かれた  
先生のお話をさせていただきます。

それから、私のこの放送、聞いておられる方  
から去年も一昨年も、お手紙やメールを頂き、  
ありがとうございました。全て読ませていただ  
いております。今年もまた、ご意見やご希望が  
ございましたら、どうぞよろしくお願い致しま

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内V」

第2回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、2回目の今朝は、明治14年に大阪の難波で布教を始められた近藤藤守という先生のお話をさせていただきます。

ちなみに、私は長年の上方落語ファンで、昔の大阪の町や人の話も大好きなんです。それで金光教の教典や教祖さんの伝記で、この近藤先生のお話を読んだ時、その面でも惹き付けられた。それも紹介をしたいし、時間は限られてるしで、ちよつと困っております。

というのが、幕末生まれの近藤先生。家が

坂城の側で公儀御用の飛脚問屋を営む、代々の老舗だったのだそうです。もうそれだけで私、「幕末動乱の時代には、幕府の密書なんかも運んだのかな」と、興味が広がったんですね。

しかもその大きな飛脚問屋の主、近藤先生のお父さんが身の修養、つまり人格の向上を心がけてる人で、摂州吹田の垂水に住む及川鼎という、仙人みたいな人のもとに、教えを受けに通っておられたという。吹田市には現在も垂水町という住宅街がありますが、当時は竹藪か何かが広がってたんでしょね。そこに隠れ住む高潔の士で、名前が及川鼎。私、「うわあ。ええなあ！」と、声を上げたくまりました。

で、ある時、まだ子どもだった近藤先生も一

緒に行きましたら、及川仙人から、「おまえはこの先、17歳の時、25歳の時に大病をする。後の病気は助からない」と、そんな意味のことを言われたそうです。

一方大阪では、教祖さんの教えを受けた白神新一郎しんいちろうという徳の高い先生が、岡山から出てきて、明治12年には伏見町ふしみまちに布教所を開いておられました。伏見町は船場せんばの一角で、上方落語でもおなじみの町ですから、私、本当に面白くて仕方がない気持ちになりましたね。

で、近藤先生は及川仙人に言われていたとおり、25歳の時、本当に大病をして、頭の具合の悪さが続いてましたので、人に勧められて、その布教所に参りました。そして、「天地の恩」を説く白神先生の教えに接して、「あの人はず

とえ山師やましにせよ、教えは結構である」と、非常な感銘を受けられたんです。

そこである晩、すでに自宅にも祀まつった神様の前に座り、覚悟を決めて思いました。

「自分はこれまで、神様のことや、天地の恩ということは知らなかった。国の法律に触れることはしてきてないが、先祖からの金を湯水のように使ったりして、神様の法律は数々犯してきたに違いない。頭の大病にかかるのも、いわば当然の報いだ。今日は神様に一切の懺悔ざんげをして、そのお裁きを受けよう」

そして懺悔を続けるうちに、いつの間にか眠ってしまい、次に気が付くと夜が明けており、長らく重くどんよりとしていた頭が、すっきりと冴えわたっていた。さあ、一晩で助けてもら

えた近藤先生、それからばぐんぐんと信心の道を進まれたんですね。

ところでその大病は、今の言葉で言えば副鼻腔炎、つまり蓄膿の重い症状だったらしいですね。ですから、鼻から膿なんかも出ていたんでしょう。当時、町の医者に診てもらったら、「脳みそが腐る難病だ」と言われたそうで、まあ、昔の医者は無茶を言いますね。

さて、そんなわけで信心を進めた近藤先生、備中大谷へ初めて参った時には、教祖さんから懇切丁寧に、長い時間をかけて、信心の心得などを聞かせてもらえました。後日、近藤先生からその報告を受けた白神新一郎先生が、「私らでも、なかなかそう長い時間はお話ししていただけないのだが、あなたはよほど機が熟して

いると見える」と喜ばれたという、そんな話も残っております。

そして明治14年、近藤先生は大阪の難波で布教を始められたんですが、何とその時代の難波は、まだ村だったそうです。現在、金光教難波教会の大きな建物は、南海電車難波駅のすぐ近くにありますが、あの繁華街一帯が村で、大阪市に編入されたのは明治30年だということですから、驚きました。

で、それからの年月、近藤先生は修行と人助けを進めて、徳の高い先生になられました。それまで神道の管轄下にあった金光教は、明治33年に独立するんですけど、その準備や交渉事にも尽くされて、のちには金光教の重鎮とされる先生の1人になられました。

そしてそれとともに、お弟子さんを大勢育てられ、そのお弟子さんたちは、まずは関西一円に出社<sup>でやしつ</sup>、つまり系列教会を開いていかれました。

それでは来週は、教祖さんのところに参つた信者さんのお話をさせていただきます。ありますがございました。

難波教会の出社が京都に出来て、そのまた出社が、北海道の函館に出来たなんて例もありまして、当時の金光教の、教えの広がり具合がよく分かるお話です。

私、仕事柄もあつて、「偉い先生がおられました」だけでは、心に収まらない。こんな生まれ育ちで、こういう体験をした結果、そうなられたんですよ、その人物像がリアルに分かつたら、それがうれしい納得に繋がるのです。近藤藤守先生は、その代表例の一人でしたので、当時の大阪の街の様子にも触れながら、紹介をさせていただきますました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内V」

第3回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、3回目の今朝は、きやうてん教典に出てくる大勢の信者さんの中から、「うらやましいなあ」とか、「ははあ。こういう人もいたのか」とか、私の心に残ったエピソードを二つ選んで、お話をさせていただきます。

一つ目は、あきやまよねぞう秋山米造という、子ども時分から教祖さんのところへ参ってた人と、その兄の熊吉くまきちという人についてのお話です。米造さんは、まだ14歳の頃に、すでに教祖さんから、「秋山は信心が好きであるなあ。人の助かるような信

心をしなさい」と、言ってもらえていました。そしてのちに、兄弟一緒に参った時には、こう言われました。

「弟は不器用であるから、おかげを受けて人を助けてやれ。兄は手先が器用だから、そのほうで出世をさせてやろう」

そして、この兄の熊吉さんは彫刻、彫り物の道に進んで、名を上げたんだそうです。

それで私、初めてこれを読んだ時、本当にうらやましかった。というのが、作家なんて不安定な仕事ですからね。自分も駆け出しだった若い時代に、まだ金光教には全く無関係でしたけど、もし御縁ごえんを頂いて、教会の先生からこういう、先を保証してもらえようなことを言ってもらっていたら、どれだけ安心できたことかと

思ったわけです。

別の信者さんで、「綿打ち」の仕事をしてる人が、あまり繁盛しないのでお願いに参ったら、教祖さんから「暇のないようにしてやろう」と言ってもらえて、それから、いつも仕事があったという、そんな話も教典に載ってまして、これなんか思わず、「私もそうしてください」と、心の中でお願いしておりました。

もちろん、そうやって願って、仮に保証してもらえたとしても、本人が怠けてたら、それが実現するわけはありませんから、そのお言葉を無にしないよう、一層の努力をしなければならぬ。お願いしつつ、自分も努力する。それが人間として、信心する者として、取るべき姿勢だとは思いますがね。

ちなみに、先ほどの秋山兄弟、兄は彫刻家になりましたが、弟の米造さんは教祖さんのお言葉どおり、信心を進めて人助けの道に入り、のちに岡山市の天瀬あませというところで、教会を開かれました。そしてそこは明治・大正・昭和と発展して、現在、金光教天瀬教会あませという大きな教会になっております。

二つ目は、教祖さんと同じ浅口郡大谷あさぐちぐんおおたにに住んでいた、大西秀おおにしひでという、女性の信者さんのお話です。明治時代の中頃、この人がまだ娘時分に、鉄道を通す工事が始まりました。今の山陽本線ですが、秀さんは友達2人と一緒に、それを見に行っただけです。

ところが友達の1人が、現場作業の監督をしている男性が好きなので、その人に会いたい

からと言って、夕方になって、「帰ろう」と誘っても帰らない。仕方がないので、もう1人と一緒に帰ってきたんですが、したらその父親が、「1人だけ置いてくるとは何だ。もう一緒に遊んでくれるな」と、かんかんに怒りました。

さあ、自分が悪いわけでもないのに偉そうに言われた秀さん。腹が立って仕方がないので、教祖さんのところへ参って訴えました。

「私は腹が立って、晩ごはんも食べられませんが、今夜は眠れないほどです」

そしたら教祖さんが、「立った腹は、そこへ置いて帰りなさい。神様にお願いさえしておればよろしい。今晩中に向こうから謝りに来るから、そう苦しなくてもよい」と、穏やかに言ってくれました。で、結局どうなったかと

いうと、怒った父親の代わりに母親が謝りに来てくれて、次の日からはその父親も優しくものを言ってくれたそうです。

しかし、今この放送を聞かれてる皆さんの中には、「それと信心と何の関係があるのか。そんなつまらんことを、訴えてもいいのか」と、そう思われた方がおられるかもしれません。でも実は、それでいいんですね。

さっき申しました先の仕事のことでも、あるいは今の話の愚痴みたいなことでも、金光教では、「どんなことでも願え。箸の転んだようなことでも願え」と教えられておりまして、全国各地にある教会では今も、教会長や所属しておられる先生方が、毎日毎晩、その聞き取り役を勤めておられます。

信者さんたちは、日常生活の中での嫌な事、心配な事、困ってる事、また逆に嬉しい事、安心した事、有り難かった事など、何でも遠慮なく話をしておられますし、聞き取った先生は、それらを全て、神様に取り次いでくださっています。

願いの成<sup>じようじゆ</sup>就<sup>じゆ</sup>や、難儀<sup>なんぎ</sup>の解決を祈ってください、同時に信者さんには、そのためにはどうすればいいか、どうすべきなのかを、神様の教えや、教祖さんの教えを元にして教えてくださる。そしてまた、事に応じて神様にお礼を言い、お詫びを申し上げ、細かくお願いもするようにとも教えておられる。お礼・お詫び・お願い。先生の親切な取次<sup>とりつぎ</sup>とともに、これが金光教の根本になっているわけです。

というところで、時間がきました。来週は松井<sup>まつい</sup>ツル先生という、京都の方のお話をさせていただきます。ありがとうございました。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内V」

第4回

おはようございます。「かんべむさしの金光

教案内」、4回目の今朝は、松井まついツル先生という、女性の先生を紹介させていただきまます。幕末生まれの京都の方ですが、今でも似た話がありそうな体験から、信心の道へと進まれた先生です。

というのは、この松井先生、若い時代には祇園おんで客商売をしておられて、その付き合いで、毎日のように酒を飲んでらしたんですけど、それが進んで、ついには、今の言葉でいえば「依存症」になったんですね。

それで胃をやられ腸をやられ、おまけに肺の具合も悪くなつて、さらには神経痛からリウマチまで出るという、病気の巢みたいな体になられたんです。もちろん医者にはかかってまじたけど、全然良くならない。

そしたらある時、知り合いの芸者さんが、「私には有り難い神様を信心しています」と言つて、そのお下げいただいた御神酒おみきを持ってきてくれました。そしてそれを体の痛む部分に塗つてくれたら、すつと楽になつたんです。

それで驚いた松井ツル先生、「信心しておられるのはどんな神様ですか」と聞きましたら、芸者さんは威儀いぎを正して、「我々の親である神様、天地金てんちかね乃神様のみかみさまと申します」と言つて、その教えを聞かせてくれました。

例えば、人間の肉体の親は両親だけど、本体、つまり魂、みたまの親は神様なのどうか、願いや困り事があつたら、子どもが親に頼むように、遠慮なくお願いすれば聞いてくださるのだとか、神様に喜んでいただく生き方をしていくのが根本なのどうか、そんなことを教えてくれたのかもしれないね。

そして後日、京都の島原しまげんに出来てた教会に一緒に参拝させてもらい、それをきっかけに病も快方に向かい出しましたので、松井先生は本当にうれしくて有り難くて、島原教会に毎日通うようになられたんです。

また皆で、今の岡山県あまぐち浅口市せんこう金光町にある御本部ごほんぶに参らせてもらった時、当時のことです。から船で行ったその途中、突然胸が激しく痛み

出して、治まらなかったことがありました。それで神様に必死に祈ってましたら、大きな血の塊を吐いて、その結果、長年の肺の病氣も治ることになったんだそうです。

金光教では、願いをかなえてもらったとか、難儀を解決してもらえたとか、神様の力の現れを「おかげ」と呼んでいるんですけど、この松井ツル先生、いわゆる奇跡的なおかげを、他にもいろいろ受けられた方です。そしてのちには、教祖さんはすでに亡くなられていましたので、その跡を継がれた二代金光様から直々に、「松井は東京で道を広めるように」と言われました。

「私のような何も知らない、字も書けない者に、そのようなことは」と辞退したんですけど二代様は、「それでよろしい。実地に当たって

やれば大丈夫です」と仰いました。そこで松井先生、東京の芝しばにある教会で1年間修行をした後、明治24年、当時としてはもう高齢の59歳で、日本橋にほんばしに新たな教会を開かれたんですね。

で、私がこの松井ツル先生のお話を読んで、まず思ったのは、「昔の京都の雰囲気がよく出てるなあ」ということでした。芸者さん、京都では芸妓げいこさんでしょうけど、その人が神信心かみしんじんをしていて、それを教えてくれた。そして連れて行ってくれた教会は島原にある。

島原は江戸時代から栄えた花街はなまちですけど、その一方では、そこで働く女性たちは、つらい思い、哀かなしい思いもしてたそうですね。そこを考えると、当時から金光教の人助けは、そのあたりもちゃんと視野に入れてたことが分かりま

す。他にも似た教会があちこちにありますので、京都大学人文科学研究所じんぶんかがくの先生が、それを調べて研究されて、「金光教と遊郭ゆっかく・花街」という、論文を書いておられるほどですからね。

ただしもちろん、金光教の教会は全国の都市や地方にあります。繁華街にもありますし、下町の商店街にもありますし、高級住宅地とされる町にもあります。どこに住むどんな人だろうと、願い事や悩み事のあるのが人間ですから、いつでも誰でも神様に頼ってこれるように、広くカバーしてるわけです。

それから、松井ツル先生は、明治時代に日本橋教会の会長になられたんですが、会長は女性ですという教会は、今も各地にありますし、金光教の先生の半分は女性なんだそうです。教

祖さんが、「女は神に近い」と言っておられたくらいですから、その伝統は現在も生きてるわけですね。

またこの松井ツル先生は、東京でもずっと、やわらかい京都弁で通されて、「私は何んにも知りませんが、神様は何もかもよう御承知でありますからなあ」と、常に言っておられたそうです。そして日本橋にも花柳界かりゅうかいがありましたから、芸者さんの信者さんも多くて、大変慕われたそうです。見かけは華やかでも弱い立場にいる人たちを、包み込む優しさがあったんでしょうね。このあたりも、私の好きな雰囲気です。

それでは最終回の来週は、今度は大工さん出身で、教育にも力を尽くされた、佐藤範雄さとうのりおとい

う先生のお話をさせていただきます。ありがとうございます。

《金光教案内》

「かんべむさしの金光教案内V」

第5回

おはようございます。「かんべむさしの金光教案内」、最終回の今朝は、主として金光教の教典と教祖さんの伝記から、佐藤範雄という先生のお話をさせていただきます。

佐藤先生は幕末時代、備後の国の御領という村で生まれ育ちました。今は広島県福山市の一部ですが、当時は農村地帯でした。そして明治の初め頃、16歳の時に大工さんを志して、棟梁のところへ弟子入りしました。と同時に、学問が好きだったので、夜学にも通って勉強されたんだそうです。

私、初めてこの話を読んだ時、「へえっ。明治の初めに、備後のような地方の町にまで、夜学が出来たのか」と、感心しました。前に、自分にとって教典や伝記は、幕末から明治時代のことが分かる面白い本だと申しましたが、これもその事例の1つです。

そして佐藤範雄先生、縁があつて、備中大谷の金光様の教えも知られたんですが、その時、驚いたことがありました。大工さんですから、当時はもちろん現在でも、家を建てる時の方位や方角、また棟上げ式の日柄なんかも、気にして選びますね。ところが金光様は、「それは迷信だ」と教えておられるという。

「方位方角や日柄に、善し悪しはない。どこどんな場所でも、すべて神様のお土地なんだ

から、ここに家を建てさせていただきますと前もってお断りし、事故や間違いが起きませんようにと、よくお願いしてから、かからせてもらえば、神様は守ってくくださる」…。

当時としては常識破りの教えですが、佐藤先生、方位方角や日柄には疑問を感じておられたらしくて、非常に納得されたんです。そして、明治9年に初めて教祖さんのもとへ参った時には、「一心に信心せよ。大願成就たいがんじょうじゆさせる」と言ってもらえました。

仕事に関しては佐藤先生、左甚五郎ひだりじんごろうのような名人になりたいと、大きな願いを抱いておられましたから、そのことだと思つて喜ばれたんです。しかし実は、教祖さんはその後、「人を助ける身となれよ」とも言われてた。大願成就

は、その面でのことだったんですね。

ちなみに、人にはそれぞれ、自分にも自覚できてない進路、人生の道筋があるように思えることがありますね。私にしても学生時代には、作家になりたいとは思っていませんでしたし、まして中年になつてから金光教の信者になるなんて、考えてもいかなかった。偶然と言えば偶然ですが、その偶然の重なりが、いつしか必然の道筋になつていく。これはやつぱり、神様のなさることかなあと、そう思つたりもするわけです。

佐藤範雄先生もその後、教祖さんから何度か、「今の仕事を辞めて、人助けの道に入りなさい」と言われてたんですけど、聞かずに大工さんを続けておられました。そしたらある日、仕事の

現場で続けざまに、大怪我をしかけたり、死にかけたりするほどの事故に見舞われました。さすがに佐藤先生も、それを神様からの戒めだと感じられて、それでついに大工さんを辞めて、別の「大願成就」の道筋に入られたんですね。

そしてこの佐藤範雄先生、人助けに励まれ、出身地の御領に教会も開かれましたが、それとともに明治33年、それまで神道の管轄下にあった教団が、金光教として独立する時にも力を尽くされました。政府の神道本局というお役所から質問状が発せられて、その記録を見ると面白いですよ。

「完全なる宗教は、宗教として必ず完全なる世界観を要す。金光教の世界観は如何」、地球の回転は、物理学の原則以外に神の勢力を認

むるや」、「肉体と靈魂の関係及び人生死後の観念如何」などなど…。

その回答書を作るのは大変だったでしょうけど、いかにも明治時代らしくて、地球の回転についての質問なんか、私は思わず笑っておりました。

また佐藤範雄先生は、若い人たちの教育にも、大きな力を注がれました。明治27年に御本部に神道金光教会学問所を作られ、それが発展して、金光中学校という学校も出来ました。最初は、古い民家を借りて授業をしていたそうで、校長も兼務されてた佐藤先生、「学校は豚小屋だが、そこから優秀な人物を出す」と、生徒たちを励ましておられたそうです。

そして、その流れは現在も広まっておりまし

て、岡山県浅口市あさくちに金光学園、大阪府内に関西  
金光学園という学校法人があります。金光学園  
は中学高校の一貫教育校を運営していますし、関  
西金光学園の方は、中学2校と高校3校があつ  
て、兵庫県赤穂市あこうの関西福祉大学も運営してお  
ります。すべて男女共学で、もちろん誰でも受  
験できます。

余談ですけど、高校のうちの1校が、時々、  
高校野球でニュースになったりする、金光大阪  
高校です。私は、大阪市内にある玉水教会たまみずとい  
う教会に通わせてもらっていますが、金光大阪  
の野球部の選手たちが、必勝祈願に参つて来る  
こともありまして、みんなやつぱり、背が高く  
て大きな体をしてますねえ。

というわけで、「かんべむさしの金光教案

内」、5週に渡つて、お聞きいただきました。  
機会がございましたら、またいつかお話を。あ  
りがとうございました。

《教師インタビュー》

「あなたが私をいじめるのなら」

(ナレ) 大阪府にある金光教堺<sup>さかい</sup>教会で生まれ育った白神<sup>しろかみ</sup>ナナさん、25歳。「8人兄弟の7番目に生まれたから『ナナ』という名前なんです」と、明るく笑うナナさん。ナナさんは中学生の頃、急に友達からいじめを受けるようになったそうです。

(白神) 私はもともと小学校からずっと仲のいい子たちと一緒にいたんですけど、中学になったらいろんな学校が合わさるので、小学校からどんどん友達が増えるじゃないですか。その中で新しく仲良くなった子が、急に、私をもとも

と仲良かった子の悪口を言ってたというふうに言いふらして、それはその子が他の子たちと、仲良くなりたいために言った嘘なんですけど、みんなそっちを信じてしまっただけで、急に呼ばれられて、本当に漫画にあるような、10対1みたいな感じで、どわーって言われて。そこからだんだん、休憩時間になるたびにクラスに言いに来たりとか、わざとぶつかってこられたりとか、もう本当、暇さえあれば嫌がらせをされるみたいな状況でしたね。

中学校で新しく仲良くなった友達から、突然嘘を言いふらされて、ナナさんへのいじめが始まりました。その後、いじめられていることをお母さんに打ち明けたナナさん。その時、お母

さんから伝えられた言葉は、すぐに受け入れられるものではありませんでした。

学校に行くのがもう本当に嫌で、お母さんに言うのも、家族に言うのも、言いくいじやないですか、いじめられてるっていうこと。でもやっぱり学校に行かへんってなったら、結局ばれるから、もう言わなあかんと思って、お母さんに「今、実はいじめられてて」みたいな。

もちろん母も最初からは否定せずに、全力で「大丈夫？」みたいな感じで受け止めてくれたんですけど、2、3日経ったら、「ずっとそうやって相手を憎んでたらあかんよ」って言うってくれて、「そうやって相手を憎んでたら自分はずっとしんどいから」って。相手がいじめをし

ている状況って良くないじゃないですか。なので、「そういうことをせえへんような心になるように祈っていきなさいよ」って言うてくれたんです。最初はその言葉も、「なんで相手のことと祈らなあかんねん」って思ってたんですけど。

やっぱり受け入れられないじゃないですか。だって嫌がらせされて、しかも自分が言ってもない嘘で。それを皆が信じて、ずっと嫌がらせを受けるっていう状況が受け入れられなかったんですけど、そういう母の言葉があったから、祈るっていう方向が見えたというか。今までは憎むっていう道しかなかった、その考えしかなかった、そんなしんどさだったけど、そこに「祈る」っていう選択肢もできたっていう感じですね。

すぐには祈れないんですけど、でもだんだん自分の気持ちも落ち着いていって。もともと仲良かった子なんで、そういうことしてるのも、それを見るのも、あんまりうれしくないというか。だんだん祈れるっていうか、そういう憎まない方向に、自分の気持ちを持っていくことができたっていうのはありますね。

ナナさんは「すぐに相手のことを祈れたわけじゃない。でも、もともと仲が良かった友達なので、いじめをしているのを見るのもうれしくなかった。それでだんだん祈れるようになっていった」と、その時の胸の内を語ってくれました。

ナナさんは、相手を憎む道から祈る道へ、心

の向きを変えていったのです。相手のことを祈っていく中で、事態は思いもよらない展開を迎えます。

だんだん私へのいじめが薄れていって、また次のターゲットになるタイミングがあるんですね。その次のターゲットも、私と同じクラスの子やったんですけど、その子がターゲットになる時に、私もそのいじめてるグループの子から言われるんですよ。「次、あいつやから」みたいな。「無視してな。あいつのこと無視してな」って言われるんです。その時に、普通やったら自分がいじめられたくないから、無視するとか合わせてしまおうと思うんですけど、その時はなぜか、「いや、自分はやらへん」っていうよう

な言葉がすつと言えたんですよ。それは、私からしたら、本当に自分で言った言葉とは思えなくって。あー、なんかこれが神様が言わせてくれた言葉なんやなって思ってた。

もちろんそこに、母が祈ってくれてたっていうのもあると思うんです。そういう部分も絶対あったのかなって思いますし、それが2回ぐらいいあったんですよ。いじめに誘われて、「次はあいつな」とか、「あいつ、こう言ってたよな」って私に悪口を促すような状況とかもあって。そういう普通やったら合わせてしまうような状況でも、合わせへん選択ができた。合わせへん選択をさせてくれたっていうのが、私には自分の言葉ではなくって、パツて神様が言わせてくれたように思えて、すごいそれが思い出に残っ

てますね。記憶に残ってます。

その後、ナナさんへのいじめはなくなっていたそうです。また、ナナさんがいじめに加わること拒否したことで、いじめられる予定だった子から感謝され、友達になっていったそうです。そして、それをきっかけに、クラスのいじめ自体がなくなっていました。

それは、いじめていた子たちもまた、助かっていったということではないでしょうか。ナナさんの祈りは、神様が言わせてくださった言葉として現れ、ナナさんだけでなく、いじめていた子たちも、いじめられようとしていた子も、皆が救われていきました。

ナナさんはこの経験から、「どんなにつらい状況でも、神様に祈っていくことで、絶対に神

様がいろいろにしてくださいと実感している。  
それは揺るぎないです」と熱く語ってくださいまし  
た。

現在、ナナさんは金光教教師となり、教会で  
の奉仕に加え、生きづらさを抱える人たちに寄  
り添う活動をしています。



《平和》

「あの日、佐野の海岸で起きたこと」

(ナレ) 島根県にある、金光教北堀きたぼり教会の教会長、福嶋ふくしま義次よしつぐさん、88歳。昭和9年に、岡山県金光町こんこうで生まれ、幼少期をのどかに過ごしました。昭和16年に父親が、大阪府にある金光教きんこう佐野さの教会で奉仕することになり、家族は揃って大阪へ引っ越します。福嶋さんはその時、小学1年生。平和な日常が、その頃から少しずつ変化していききました。

(福嶋) 小学校1年生の12月から、太平洋戦争が始まりましたね。何年生の頃からか忘れたけ

れど、校門に、銅で作った胸像が3つ並んだんだ。ルーズベルトとチャーチルと蔣介石しやうかいせきとね。それで、登校してきたら、その胸像の顔やら頭あしずを足蹴あしずにせなあかんのよ。蹴らないかんのよ。それをちゃんと先生やら上級生が見てて、蹴り方が悪かったら蹴り直し。これはね、敵愾てきがい心しんとどうか、闘争心を子どもたちに植え付けて、敵国が何であるかということを教え込む、1つの教育の手段だったと思うんだけど、後で考えると、とんでもないことで、なんであんなことしたんだろうかと。

どんな教育上悪いことでも、教育上良いこととして進めていくことが、戦争というものは起こってくるもんだなと思うんですね。子どもにそういうことをさせる教育というのが、戦争の

教育だわな。その頃は何の気なしにやったりしましたよ。面白くて。

その後、戦争の長期化に伴い、物資は不足し、人々の生活は、次第に苦しくなっています。そして昭和20年、終戦の年の7月に、福島さんにとって忘れられない出来事が起こりました。

小学校の5年生の時だったかな、授業の途中でね、5年生、6年生に召集がかかって、海岸へ出てくれた。そうすると、漁師さんたちが慌ただしくしてる。船を漕いだりね、傷ついた人を海岸へ連れてきたりして、海岸へずっと傷ついた人が並んでるわけ。その漁師さんから聞くと、あの沖合見てごらんと。あの船だと。輸送

船だったんね。それが、アメリカのグラマン機の機銃掃射きじゅうそうしゃを受けたんだな、突如。傷ついた人、いっぱい出たみたいなんね。そういう人を海岸へ運んでた。私たちに与えられたお役目というのは、そういう兵隊さんたちを、小学校の講堂へ連れて行くことだったと思うのね。亡くなった人はもう、海岸へ並んでたと思うけども。頭を撃たれた人やら、腕のちぎれた人やら、歩けなくなった人やらね。なんかそこらにある船の、この板、フロアっていうか、あれに乗せて講堂までお連れするわけね。まあねえ、子どもよ。子どもだったから、それはもう大変なシヨックだわな。血を見るだけでも、もう怖いもんね。それが、機銃掃射でいろんな傷を受けた人たちを運ぶ。ただ運ぶだけじゃない、そういう人た

ちはうめくわね。痛い痛いと言うて叫ぶわ、それから大変でした。講堂へずらつと、ほぼいっぱいになったんか、並べられておつたですね。もうその時に戦争は嫌だと思つたね。こんなことなんでしなきゃならないのか。

終業式に行った時は、もう講堂も綺麗になつて、跡形もなかった。学校の先生たちも何も言わなんだ。何があつたかということ。今だつたら新聞に載るでしょう、そういうことがあつたら。新聞にも載らないわ、学校の先生も何も言わないわね。噂にもならないね。何が起こつたんだろうかと、いまだに疑問に思うし不思議に思うし、事実は本当にどうだつたんだろうかと思うし。

つらいし、悲しかったし、戦争は嫌だと思

つたし。どうして戦争しなきゃならないんかって思つたしね。

次の日から学校は夏休みになり、そのまま終戦を迎えます。この時何が起こつたのか、最後まで福嶋さんには分かりませんでした。しかし、この時経験したことは、つらく、悲しい記憶として、「どうして戦争をしなければならぬのか」という気持ちと共に、今でも、福嶋さんの心に、深く刻まれています。

戦争ねえ、どうしてするんだろうか。人間ていうのは、違うということが気になる人と、違うからいいんだって言う人と、分かれてくると思うのよね。教祖様の、5本の指のお話がある

でしょう。5本の指が揃うてたら働きをなさんけども、それぞれ違うから、働きをするんだという。違うということにどれだけ、この天地の中で大切な意味があるのかというのを、人間は十分に知り切ってない。違うということに嫌悪

違いを認める。違うからいい。それが、平和を思う基本だと言う福嶋さんは、あれから80年近くが経った今でも変わらず、平和への祈りを捧げています。

する、心の中っていうのがあるとと思うんよね、誰にでも。これ乗り越えるっていうことは、これはもう本当に大変な努力をしないとイケないし、また、人間だけの努力ではどうしようもない。そこに何か、神様だとか、見えないもの。見えないものの力のもとで、違うんだということとを学ばないとね。そこにね、ご信心の大切さというものがあると思うのね。差というもの、違いというものを、どう認められるか、どう許せるか。まあ、難しいことですよ。

《教師インタビュー》

「同性愛者であるということ」

(ナレ) 兵庫県赤穂市あこうにある、金光教加里屋教かりや会で奉仕している井上真之さんいのうえまさゆきは、平成30年に、「金光教LGBT会」という団体を立ち上げました。「LGBT」とは、女性同性愛者のレズビアン、男性同性愛者のゲイ、両性愛者のバイセクシャル、性同一性障害のトランスジェンダーのそれぞれの頭文字を取った総称で、セクシヤルマイノリティー、性的少数者を指します。真之さんがこの会を立ち上げたのは、自身が同性愛者で、悩み苦しんだ経験があったからです。真之さんは小学6年生の頃から、「女の子っぽい」と、同級生にからかわれるようになりま

した。

(井上) 年齢が上がるにつれて、からかいがエスカレートするようなどころもあり、段々と人が怖くなっていきました。例えば、笑い声が聞こえると、自分のことを笑っているのではないかというふうに感じてしまったり、人が怖いという気持ちが出てくるようになり、授業中にいきなりお腹が痛くなったりとか、そういう心の不安が身体にも出てくるという事もありました。

真之さんは段々と外に出ることすら難しくなっていくます。そして、中学生になり、自分の恋愛対象が同性であることに気づき始めます。

自分が周りの人と違うこと、いじめられていることに、悩み苦しむようになりました。そして、そのことを誰にも相談できずに、ついには自ら死のうとまでしました。そんな真之さんを心配した家族は、真之さんに、金光教の教会へお参りするように勧めます。真之さんは、週に1度その教会に通って、教会の先生に悩みを聞いてもらいました。

「おかま」だとか何とか言われて馬鹿にされているという事は、親とか家族、学校の先生にはなかなか言い出せないことでしたので、当時、唯一、教会の先生にだけは言えるというような感じのこともありました。苦しんできた事を吐き出すのは簡単なことではなく、例えば学校で

嫌がらせを受けた事を話す時には、いじめっ子に囲まれているシーンが蘇ってきたりして、呼吸が苦しくなるような事もありましたけれども、教会の先生にお話をさせてもらうと、一つ心の傷を癒やしてただけるのか、楽になって、帰る頃にはとてもすっきりしていました。

真之さんは日々、「1人が怖くならない自分にならせてください」と神様に祈りながら、今日はコンビニ、明日は郵便局など、目標を立てて外に出る練習をしました。その甲斐もあって、次第に外出が出来るようになり、社会と関わる事が出来るようになっていきました。

しかし、恋愛対象が同性であることに変わりはありませんでした。16歳の時にそのことを教

会の先生に相談し、両親にも打ち明けました。どちらも優しく受け止めてくれました。それからの真之さんは、「女性を好きになれますように」と祈りながら信心を続けました。

その後、真之さんは金光教の教師になりました。しかし、祈っても祈っても同性愛者であり続ける自分を、信心が足りないからだと、責めるようになったのです。ところがそれでも祈り続けるうちに、LGBTの当事者と出会う機会が続くようになり、真之さんは、ある思いに至ります。

神様がもしかしたら私に、「このまま生きていったらどうか」とおっしゃってくださいているのかもしれないと思ひまして、教会の先生

に、「10年間私は異性を好きになれるように努力もし、またお祈りもしてきました。けれども変わることはなさそうです。同性愛者として生きていこうと思います」ということをお届けしました。そうすると、「ありのまま生きていいと思いますよ」と、声をかけてくださいました。

神様が、私の「異性を好きになりますように」という祈りを通して、その通りのおかげというよりは、私の命に応じた導きをしてくださったなあというふうに感じています。25歳くらいの時ですかね。ようやく自分で自分のセクシャリティーを受け入れる、受け止めることができるようになりました。

私は受け入れてもらって長年の苦悩から解放

された日々を送っていますけれども、話ができ  
る人との出会いがない人とか、あるいは「悩ん  
でいても人には言えない人が世の中にはたくさ  
んいるのではないかな」というふうに思いまし

て、そういう人たちに助かってほしいな、とい  
う願いが出てきました。まあ、そうは言っても  
ですね、ゲイであることを公表してですね、働  
きかけていったり御用をさせていただくという  
ことは怖いことでありました。そんな時に、あ  
る別の教会の先生とのお縁を頂きました。

その先生に、これまでの経緯を話すと、「誰  
が敵になっても、神様はあなたの味方です。あ  
なただったら乗り越えて人助けの御用ができる  
から、神様がそのセクシャリティーを授けられ

たんですね。どうかLGBTの方たちが金光教  
でも助かるように、扉を開いてください」と笑  
顔で言ってくれたのです。

それまでは「同性が好きである」ということ  
は、自分にとってマイナスなことだと思ってい  
たんですけれども、役割の一つなのだというふ  
うに、前向きに感じられるようになりました。

LGBTの正しい理解が広がるようにと願っ  
て、あるいはですね、自分を否定して苦しんだ  
り、信仰をしていますが、違う解釈をしてしまっ  
て、自分を否定してしまう、そのようなことか  
ら解放されて性的マイノリティーを前向きに捉  
える働き、前向きに捉える信仰がもっと生まれ  
るようにと願って、金光教LGBT会を立ち上

げることになりました。

は違いのある人間同士です。一緒に生きていけたらなあと思います。

信心しても変わらないと、自分を責め続けた真之さんでしたが、同性愛者の真之さんにだからこそ、かけられた神様の願いがありました。

自分が他の人と違う、と悩んでいる方へ。真之さんからのメッセージです。

今悩んでいる方もそのことに道が付いてきて、いつかその悩みや苦しんできたことが、自分のためだけでなく、誰かのために生きてくるようなことがあれば、それは神様の喜びにもなりますし、自分の財産にもきつとなると思います。乗り越えるところまでは大変ではありませんが、あなたは一人ではないと思います。私たちが

## 《教師インタビュー》

### 「命のほうが大それたから」

(ナレ) おはようございます。前回は、LGB

T、性的少数者のゲイであることを公表された、

井上真之さんいのうえまゆきにお話を聞きました。今回は、真

之さんの父、福岡県の金光教黒崎教会くみさきで奉仕す

る、井上憲親いのうえのりちかさんにお話を伺いました。

憲親さんは、真之さんが中学生の頃から、学校の成績や進路のことで悩みを抱えているのではないかと感じていました。しかしその頃、憲親さんは、両親の介護に加えて、妻の両親の介護もあり、妻との別居生活を余儀なくされていきました。さらに仕事の忙しさも手伝って、多感な時期の真之さんに対して、悩みを聞き出すこ

とができませんでした。そして真之さんが高校1年生の時、自殺を考えていることを知りました。妻が、たまたま真之さんの布団の下から包丁を見つけたのです。

(井上) やっぱり、その時の衝撃は大きかったですね。当時は、LGBTの問題でそこまで悩んでるなんて知りませんから。「何をそんなに悩んでるんかな」と思っていました。もうずっと布団の中で、布団かぶって休んでおるような状態なんですよ。鬱うつみたいになっただね。

成績は、1年の1学期ぐらいいは悪くなかったです。成績もそれなりにまあまあ取ったんで、私はそれでいいと思っていれば、それじゃない問題。そして、とうとう学校に行けないみたい

なことになってしまった。それが、そういうLGBTという問題で、もう高校を辞めてもいい、というようなことを言った。私はそうじゃなくて、学校の成績で悩んだんかなと思ってた。それで、「行かんでもええ。命のほうが大事やから。学校辞めるんなら辞めてもいいから」と言うて。それで当時、真之は家内の母を尊敬しとったもんですから、「とにかくここを離れる」と言うて。私自身も両親の介護があるもんですから、真之にもあんまりかまってあげられない、という面もあるし。真之も「あっちの高校に行きたい」とかいうようなことを、その1年前には言うてたから。やっぱり息子の人生のほうが大切ですからね。そういうことで、高校を辞めたんですよね。

命を最優先させること、環境を変えることで、少しでも真之さんの気持ちが楽になればと思つての決断でした。離れて暮らす生活で、憲親さんも親としての苦悩が続きました。

最初は戸惑いですよ。やっぱり、親として自分が通ってきた道から、そういう問題を捉えようとするようなことが、どうしても心の中でありました。だけど現実には、そういう問題というのは、通ったことないわけですよ、私自身。ですから、「どうしたらいいんだろうか」みたいなね。だからといって、この問題によって、息子の人生を終わらせるようなことがあつてはならない。過去に自殺騒ぎを起こしてますからね、そんなことになったら相済まないとい

最初は戸惑いですよ。やっぱり、親として自分が通ってきた道から、そういう問題を捉えようとするようなことが、どうしても心の中でありました。だけど現実には、そういう問題というのは、通ったことないわけですよ、私自身。ですから、「どうしたらいいんだろうか」みたいなね。だからといって、この問題によって、息子の人生を終わらせるようなことがあつてはならない。過去に自殺騒ぎを起こしてますからね、そんなことになったら相済まないとい

いますか、もう親として、自分は失格だなあぐ  
らしいのことは思うてましたね。ですから、今度  
は親として、受け入れていくことを第一に考え  
させていただく。今言いましたように、自分に  
は経験のないことですしね。同性愛というよう  
なことについても、そんなに詳しいわけでもな  
いし、理解してるわけでもありませんからね。  
だからそれからは、いろいろ学んだりしながら、  
親として、息子のことを全力でサポートさせて  
もらいたいと思うようになりました。それが今  
の率直な気持ちですね。

憲親さんは全てを受け入れ、より一層、真之  
さんのことを神様に祈る日々が続きました。

「どうぞ道を付けてください」ということは、  
一生懸命お願いさせていただいたんですけど  
も。それからもやっぱり、「命を大切にしてい  
ほしい」というようなことは、一生懸命お願い  
しました。そういう願い方ですね。

一方、離れて暮らす真之さんは、同性を好き  
になることに葛藤を抱いていましたが、信頼で  
きる金光教の先生と出会い、悩みを打ち明け、  
話を聞いてもらうことで、ありのままの自分を  
受け入れることができました。憲親さんが願  
い続けて10年、真之さんが25歳の時、ゲイとして  
生きていくことを決断し、周囲にも打ち明けま  
した。

カミングアウトしてから、もうすごい生き生きしてきました。やっと、真っ直ぐ前を向いてくれるようになった。それで私も安心したということもありましたね。もう「死ぬ」なんていうようなことは、考えんようになるんじゃないかなと思います。やっぱり目とを見てたら分かるじゃないですか。それは感じましたね。

その後真之さんには、同性のパートナーが出来ました。憲親さん夫妻は、ひと月に10日ほど、2人と一緒に生活をしています。

育った環境が違うんですから、そら夫婦でも、パートナーが女性であっても、いろいろと問題は出てくることだと思うんです。だから、お嫁

さんが来られようが、パートナーであろうが、同じような思いですよ。それが男の人だったというだけで。どこのご家庭でもそうでしょうけど、やっぱり仲良くしてほしいし、一家が団らんとしてほしい。そのために、親としてできるだけのことはさせてもらいたい、というのが土台ですよ。同じ生きるんなら、少しでも笑顔が生まれるような家庭だったら、一番ありがたいなと思うんですけどね。

その人その人の育った環境なり、年齢によっても違うんでしょうけども、やっぱり、みんな大切な命ということを思い出しましたね。

憲親さんはLGBTのことに限らず、どんな問題をも、いったん受け入れ、命が輝くよう、

立ち行くよう、神様に祈る日々を送っています。



《あなたへの手紙》第1回

「食べ過ぎて太った／未来に安心を得るには」

おはようございます。大阪府にあります金光  
教ひらかた方教会の四斗晴とほるひだり彦です。

まずは50代の男性Mさんからの悩みです。

「テレビのグルメ番組で、タレントさんが美味しそうに食べている姿を見ると、ついっ  
い自分も冷蔵庫から、おつまみとビールを取り  
出しては、一緒になって楽しんでしまいます。  
おかげで随分と太ってしまいました。どうした  
らいいでしょうか？」

このような内容です。

私もお酒を飲むのが好きなので、Mさんを自  
分のことのように感じました。今回のお悩みは、  
太りたくないのだけど、ついつい食べたり飲ん  
だりしてしまう自分の弱さをどうしたらコント  
ロールできるのか、ということですね。

「太る」というのは、人間の体が、飢えるこ  
とに備えてエネルギーを蓄えてくれているとい  
う状態です。体がちゃんと働いてくれている証  
ですから、まずは、自分の体を褒めてやってく  
ださい。

では、なぜ太りたくないのでしょうか。考えら  
れるのは、初めに周りからの目があります。な  
んとなくだらしのない人、そう見られてしまうの  
が嫌だということです。人からよく見られたい  
というのは、当然誰もが持っている「認めてほ

しい」という承認欲求です。ですから、周りの目など気にせず太つてもいいじゃないですか、と乱暴なことは言いません。そこは認めていく必要があると思います。

その次に、太っていることが原因となつて、病気になることを恐れる気持ちがあるということとです。近頃は健康の基準がさまざまな数字で表されていますから、つついこれれも気になつてしまうでしょう。

しかし、これらの原因をよく考えてみてください。自分の外側にある問題です。外側のものが気になつてしまうことを踏まえて私がアドバイスしたいのは、それに振り回されてしまわないことです。自分の体の内側からの声にも耳を澄ませると、「少し重たいので動きにくいよ」、

そんな声が聞こえてくるのではないのでしょうか。

金光教の教祖様は食事について、こんなふうにご教えています。「このくらいでよいと思う時間が、神様が教えてくれる体に合う量である」。つまり、私たちには、体を整える神様の働きが備わっているのです。どうぞ、体から聞こえてくる声を、神様からのメッセージとして大切にしてみてください。自分の体に耳を傾けて、OKだと感じたら、うんと食べて飲んで、心の底から「おいしい」と言ってください。自分の体、つまり神様も喜んでくれますよ。Mさんの食生活が豊かになることを願って、乾杯！

次のお悩みは、同じく50代の男性、Sさんか

らです。

「私には子どもが2人います。現在、大学生と高校生です。昨今の戦争や疫病、自然災害、それに伴う経済不安など、何かと子どもたちの将来が心配です。未来の安心を得るにはどうしたらいいでしょうか？」

このような内容です。

昨今は、さまざまなニュースがあつという間に世界中に伝わる時代になりました。情報量が圧倒的に増え、それに比例して、不安に思う気持ちも増しているのが現代です。これから、もっと悪くなってしまうんじゃないか、と感じるのも当然のことです。

Sさんは「未来の安心」という言葉を使われ

ています。では、「安心」とはどういう状態なのでしょう。それは、ほぼ100%コントロールすることができて何も不安に思うところがない、という状態ではないでしょうか。そう考えると、未来のことを全てコントロールできるなどという状態はあり得ません。それは「神のみぞ知る」世界です。

最近読んだ本の中で、「安心」に代わって「信頼」という言葉が使われている方がおられました。安心はできないけれど信頼していく。コントロールできないような未来に対しては、「信頼」という言葉がピッタリだと、私は感じます。子どもが信頼していけるような社会、そんな社会を大人が作っていくことが出来たら、少し希望が生まれてきませんか。

その上で、Sさんに提言したいのは、子どもが少しでも未来を信頼してくれるような、あなた自身の姿を子どもに見せることです。といっても、大それたことを考える必要はありません。世界はあなたの手元足元と地続きで繋がっています。次の世代に遺してあげたい、あなたの身の回りの自然、環境に思いをはせてみてください。い。「近くの公園を掃除する」「近所の道に落ちているゴミを拾ってまわる」など、ささいなことでもいいんです。あなたが社会と繋がっている、次の世代へバトンタッチする、そんな目に見える姿を子どもたちに見せてあげてください。「自分たちのことを考えてくれているなあ」と子どもが思ってくれれば、きっと未来を信頼してくれそうです。

金光教には、「天地のことをあれやこれやと言う人があるが、人間では天地のことはわからない」という教えがあります。天地のことは神様に任せて、自分の手の届くところから信頼できる社会に、未来に変えていきましょう。私も一緒に取り組みます。

《あなたへの手紙》第2回

「子どもが言うことを聞かない  
／ 忙しいと余裕がなくなる」

おはようございます。

静岡県・金光教静岡教会しずおかの岩崎弥生いわさき やよひです。

まずは、愛知県にお住まいの30代のお母さん  
からのお悩みです。

「私には、小学校の高学年の息子がいます。  
毎日元気に学校に通っているのはありがたいの  
ですが、学校から帰って来ると、ランドセルを  
放り出し、遊びに行ってしまう。遊びから  
帰っても宿題を中々やりませんし、服は脱ぎっ  
ぱなし、部屋の片付けもせず散らかり放題です。

何度も注意しているのですが、一向に言うこと  
を聞いてくれません。どうしたら言うことを聞  
いてくれるのでしょうか」

このようなお悩みです。

元氣一杯のお子さんの様子が、目に浮かぶよ  
うです。でも、小学校の高学年ということ、  
お母さんも心配されているでしょう。

私の子育ての時の話になりますが、息子の担  
任の先生に、「お母さん、子どもは何でも100回  
やったら大概できるようになりますね。逆上が  
りも、自転車に乗るのも100回は、付き合っ  
てみてくださいね」と言われました。それは、き  
つちり100回ということではなく、諦めずに、100  
回を数えるほど付き合っ  
てほしいということな

のです。つい、「もう何度も言ってるのに、どうせ言っても聞かない」と思ってしまうですが、注意してすぐに言うことを聞かなくても、100回言うのが親の役目と思って、言い続ける。きつと分かってくれると祈りを込めながら、言っ聞かせる。そこが大切なことではないかと思うんです。

また、私の尊敬する金光教の先生が、「子どもが障子を破いて困ります」と言う人に、「それで、あなたはその障子をどうしていますか」と聞かれ、「どうせ破くからそのままにします」と答えると、「それでは、障子を破くのをやめないでしよう。破いたら貼る、破いたら貼るを繰り返しているうちに、子どもは、障子は破いてはいけないんだな、ということに気が

つきます」とお話しくださったそうです。やはり、祈りながらの根比べですね。

きつとお子さんは、片付けにしても、宿題にしても、もつと他に興味のあることがあるんですね。でも、使った物を元にあつた場所に戻すことも、コツコツ勉強することも、生きる力をつける大切な中身です。だとしたら、まずはお母さんが、やってみせてはどうでしょうか。それぞれの物の居場所を決め、家族皆で使ったら元の位置に戻す。それぞれが、何かを勉強する時間を持つ。忙しい毎日でそんなことをしている間はないと仰るかも知れませんが、子どもは、ご飯だけを食べて大きくなっているのではないと思うのです。その家庭の空気を吸って大きくなっているんです。だからこそ、この空気が何

より大切な中身になるのではないのでしょうか。

次は、40代男性からのお悩みです。

「仕事を立て込み忙しくなると、どうしても余裕がなくなってしまう。落ち着いて、ちゃんと構えているにはどうすれば良いでしょうか？」

というご質問です。

私も忙しくなつてくると、あれをやったら次はこれ、そんなふうに前のめりになって、気持ちに余裕がなくなってしまう。それに加え、私の場合だと、仕事をしながら家事が気になり、家事をしながら子どものことが気になる。いつもよそ見ばかりしている状態になって物事が雑

になっていました。結果、急いでいるのに何かを忘れたり、慌てていて何かを壊したり、2度手間になることがよくあり、でんと構えるのは、ほど遠く、無駄に動き回っていたように思えます。

それとは反対に嫁ぎ先の母は、どんな時にも慌てず、でんと構えている人でした。息子、つまり私の夫となった人が、小学生の時、ボールを追いかけて道路に飛び出し、トラックに跳ねられたことがありました。その状況の中でも、何をすべきかを適切に考え、行動し、慌てなかつた母の逸話が、今でも語り継がれています。母は、いつも自分が教えていただいていた先生からの教えを守り、喜怒哀楽の感情を土台にせず、できたことへのお礼を土台にした生き方に

なるよう、神様に願いながら、常に稽古して  
ました。気分で左右されず、今、自分が大事に  
しなければならぬことは何か、自分の役目は  
何かを問いながら御用に取り組んでいるその姿  
が、今でも私の手本になっています。

まずは一呼吸おいて、手元をよく見て。ひと  
つひとつを丁寧に、今何が大事か、お礼が抜け  
ていないか、確かめるように。

教えられている時には、窮屈で面倒くさいよ  
うに思うことが何度もありましたが、母から教  
わったことは、今となつては私の宝だと思っ  
ています。

すぐにでんと構えられる人になるのは、難し  
いかも知れませんが、何か参考になりましたら、  
試してみてください。



《あなたへの手紙》第3回

「祈ったのに事故／定年後の夫婦生活にゾツとする」

おはようございます。滋賀県・金光教大津教会の高阪有人こうさかありとと申します。41歳です。

今日の最初のお悩みは、43歳の会社員の男性からです。

「私は車を購入した時には、お祓はらいをしてもらい、車に乗る時には必ずお祈りをしてから運転します。しかしたびたび事故を起こしてしまいます。自分が悪かったり相手が悪かったりするのですが、神様にお祈りしているのになぜこうなってしまうのか、疑心暗鬼になっています。

どう考えたらいいでしょうか」

このようなお悩みです。

まず、ご無事そうで何よりです。お悩みの内容からは、ご自身に大きな怪我也、また相手を傷つけてしまったということもなさそうで良かったです。本当に事故って怖いですよ。

たびたびの事故で、「神様にお祈りしているのに」と、疑心暗鬼になってしまっておられるということですが、今、このように自分も相手も命があること、大きな怪我がなかったことは、神様のお守りを受けてのことと私は感じました。いかがでしょうか。その上でなのですが、今回はこのお悩みを通じてお伝えしたいことがあります。

それは、神様は、「事故が起こる、起きない」だけで、あなたのことを考えているのではないということ。そして、あなたのこれからの人生そのものを導こうとしているということです。

事故が起こってくるというのは、今後あなたがさらにより良くなるために気づけることがあるという、神様からのあなたへのメッセージというように思ってみてください。すると、たびたび起こしてしまったり、巻き込まれてしまう事故をどのように振り返ることができるでしょうか。また、事故に限らず、最近の仕事や職場の人間関係、家庭内のこと、良いこと悪いこと含めて思い返してみると、どうでしょうか。何か心に浮かんでくることはありませんか。

でも、何に気づいて、それからどうするとい

うことを1人で見出していくのは難しいですよ。ね。教会にお参りしてみれば、そこにおられる先生とお話できますし、お喋りの中で、神様があなたに願われているメッセージを受け取れるかもしれません。もしよろしければ、金光教の教会へお参りしてみてはいかがでしょうか。

次に紹介するのは、50代のパート従業員の女性からのお悩みです。

「新型コロナウイルス感染症の影響で、夫の仕事の上での付き合いが減り、夫が家でご飯を食べることが多くなっています。これまで、人任せにできず、何もかも自分で家事をこなしてきましたが、居間にドテツと座り、何もせずテレビを見て、料理が出てくるのを待っている夫

を見ていると腹が立ちます。これから定年になり、ずっと家にいることを想像するとゾッとします。何か解決策はありませんか」

このようなお悩みです。

新型コロナウイルス感染症が流行<sup>は</sup>り出してから、ここ何年も不自由な生活で、これがいつまで続くのか先も見通せなくて、ほんとにストレスですよ。さらに、今回ご相談いただいたあなたには、これまで外にいたことが多かったご主人が、家におられるようになった。なのに、家事を分担することもなく、デーんとずっと座っている姿に、明るい未来が見えてこない、そういうストレスを抱えておられるということなんです。

女性の偽らざる思いを聞き、妻を持つ身としてドキドキしてしまいました。ぼーっと生きてはいけませんね。

そんなことを言っている私ですが、結婚当初、当時70代のある男性からお祝いの言葉に添えて、こんなことを教えてもらいました。

「夫婦は年をとってからのものやで」

この言葉はその男性が若い頃、尊敬する人生の先輩から掛けてもらった言葉だということでした。そして「好いた惚れたとかそういうことでない、『夫婦』という人間関係があるんでせ。これはほんとに長年、人生と一緒に過ごさんと分らないでしょうな」と続けられました。このことは、私にとっても大切なお話となっています。脱線してしまいました。

さて、ご相談に戻ります。生活の変化だけでもストレスなのに、旦那さんのこともあるのはなかなかご自身の心の持ち方、私が我慢すればということだけでは、なんともしがたいと思います。ふーっと心のもやもやを吐き出して、ご主人の目線で今の生活を見てみましょう。旦那さんも、コロナ禍で不自由な思い、ストレスを抱えておられるのではないでしょうか。

その上で、これまでお仕事で家の外が多かったご主人ですから、今まではしっかり話す時間も心の余裕もなかなかなかったのではないのでしょうか、だとすれば、これをきっかけに夫婦として向き合い、先ほど私の話の中で紹介した、「年をとってからのもの」と言えるような夫婦へ歩み出してみるのもいいかもしれませんよ。

定年後のことを考えるとゾツとするなんて仰っていますが、ご主人と一緒に「先のこと」を思えるあなたなら、きっと『夫婦』という人間関係を築いていかれることと思います。

《あなたへの手紙》第4回

## 「幼い頃からの劣等感／将来への漠然とした不安」

おはようございます。東京都・金光教麻布教あざぶ会の松本信吉まつもとしんきちと申します。

最初は20代の男性からのお悩みです。

「私は幼少の頃から、勉強やスポーツ、趣味や特技など、これといって得意なものが何もなく、劣等感を感じて生きてきました。そう思うからなのか、社会人となった今、職場で誰からも見下されているように感じ、仕事場へ行くのが苦痛です。どのように対処すればよいでしょうか」

このようなお悩みです。

私も、仕事がのろくて、みんなから見下されているように感じていました。大学時代、大手ハンバーガーチェーンのシヨップでアルバイトをしていました。お店のグランドオープンにあわせて大学生30人がバイトに採用され、皆、初心者でしたので、キャリア関係なしに楽しくできるだろうと考えていました。ところが、皆、仕事ができて速いのです。ハンバーグを焼くこと、パンズにサンドすること、フライドポテトを揚げること、レジのお客様対応、フロアの掃除、洗い物など、皆、速くて丁寧な仕事ができるのに、自分はできない。やがて私は、自分の仕事がのろくて皆の足を引っ張ってるように感

じました。さらに閉店から2時間経っても店の片付けが終わりません。年上のバイト仲間からも遅いと言われます。その劣等感を感じる毎日でした。しかし、ある日、店長から、「松本は仕事は遅いけど、挨拶がいいな」と言われました。それがうれしくて、その日から、店に入る時に、「おはようございます」と、より大きな声で言うようになりました。でっかい、でっかい声で、「おはようございます！」と。すると、バイト仲間も、「まっちゃん元気がいいね」と言ってくれました。そうするとやる気が出て、多少の失敗は気にならなくなりました。そうして、るうちに、仕事も覚えて、スピードも速くなりました。段々、皆と同じようにできるようになり、劣等感を感じない自分になっていました。

あれから三十数年経ちますが、今でも年に数回、このバイト仲間と飲み会をしています。あの頃の思い出を話しながら楽しいお酒です。だから、あなたも小さなことでいいから、「いいところあるよ」「できているところある」「大丈夫だよ」と、自分を認めることからやってみてください。もし、自分を認めることができなくても、実はそのままでもいいんですよ。神様は一人ひとりの命を認め、一人ひとりを大切に思ってくれています。劣等感を抱えたあなたのことも、です。金光教の教会は、思いを吐き出して、思いを聞いてくれる、そんな場所です。あなたのありのままの思いを話してみたいかがでしょうか。

次は20代の女性からのお悩みです。

「将来が漠然と不安です。日々の暮らしも同じ毎日の繰り返しで充実しません。深刻に悩んでいるわけではありませんが、自分に残念な思いです。みんなこんなものなんでしょうか？」  
このようなお悩みです。

戦争や疫病、自然災害、それらに伴う経済不安。昨今は、世界中がそうした不安を抱えていますね。あなたがそういう時代を、どう生きたいか、どう日々を過ごしたらいいか、悩むのも当然のことです。そんなあなたに、私からは2つ提案があります。

1つ目は、何でもいいから自分の好きなことに取り組むことです。私は50歳を過ぎてから、

ギターを始めました。それまで楽器は何にもできなかつたんですよ。私はあるバンドが大好きなんです。ある時、街でそのバンドの曲と同じ名前のバーの看板を見つけました。思い切つて、そのバーの扉を開けると、やはりマスターもそのバンドのファンで、生ギターで弾き語りを聴かせてくれました。とてもすばらしい歌とギターでした。私も1曲でいいから自分でそのバンドの曲をできるようになりたいと言つたら、マスターがギターを教えてくださいとさることになったんです。その日からそのバンドの曲をギターで弾く稽古が始まりました。あれから5年、今では何十曲もできるようになり、街の音楽祭などにも出演するほどになりました。好きだから練習も苦にならず、達成感もあります。

ですから私も、この時代社会に漠然とした不安はありますが、大丈夫です。ぜひ、あなたも自分の好きなことにチャレンジしてみてください。できることに集中して行動すると、不安はなくなると思いますよ。

2つ目の提案は、今自分が居る場所を少し変えてみてはどうでしょう。例えば旅に出るというのもいいかもしれません。海でも山でも大自然の中に身を置いてみたりとか。山々に生えている何億という木々の葉っぱの1枚1枚にも、広大な海のさざ波にさえ、天地の神様のお働きが満ちています。そしてあなたも、そんな神様のお働きの中に生かされているのです。それ自体いっばいに感じてみてください。きっと自分の概念の枠が外れて、神様に包まれている温も

りを感じることができると思いますよ。

今日もあなたにとつてすばらしい1日になりますように。HAVE A NICE DAY!



**金光教本部 ラジオ放送係**

**住所** 〒719-0111  
岡山県浅口市金光町大谷320

**電話** 0865-42-6453

**FAX** 0865-42-2114

**メール** w-master@konkokyo.or.jp

# KONKOKYO

**朝日放送** 木曜日 あさ4時35分

放送センターHP  
「こころで聴く  
おはなし」



「こころで  
聴くおはなし  
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。